

4 吾妻鏡 あづまかがみ

〇一七六一。四冊中の第一冊。縦二七・五cm、横二四・五cm。

吾妻鏡は、治承四（一一八〇）年の源頼朝拳兵前後から、文永三（一二二六）年の将軍宗尊親王の京都送還までの鎌倉幕府の歴史を編年体で記した全五二巻の史書。鎌倉時代の末までに成立か。活字本として新訂増補国史大系が使用されている。史料編纂所本は、室町幕府奉行人清元定（生没年不詳）の書写した抄出本で、現存は五巻分四冊のみ。室町時代の古写本は、本史料以外には数点しかない。元定は、吾妻鏡を武家の先例・故実の参考書として利用した。掲載したのは、第一冊の巻二冒頭。治承五（一一八一）年正月十一日条には、梶原景時が側近くに仕えるようになったことが記され、十八日条には、前年末の平家の南都（奈良）焼討ちが記される。廿一日条に見える平信兼は、元暦二年源頼朝袖判下文（3）にも見える。第一冊は、室町幕府の奉行人や奉公衆から元定への書状などを反故にして書かれている。

〔参考〕前川祐一郎「室町時代における『吾妻鏡』」（『明月記研究』五、二〇〇〇）。（釈文）

吾妻鏡巻第二

治承五年辛丑七月十四日
為義和元年

正月大

一日、戊申、卯刻、前武衛参鶴岡若宮給、不及日次沙汰、以朔日被定当宮奉幣之日云々、

十一日、戊午、梶原平三景時依仰初参御前、去年窮之比、実平相具所参也、雖不携文筆巧言語之士、専相叶賢慮云々、十八、乙丑、去年十二月廿八日、南都東大寺・興福寺已下堂塔坊舎、悉以為平家焼失、僅勅封倉寺封倉等免此災、火焰及大仏殿之間、不堪其周章投身烧死者三人、

両寺之際、不意烧死者百余人之由、今日風聞于関東、是相模国毛利庄住人僧印景之説也、廿一日、戊辰、熊野山悪僧等、去五日以後乱入伊勢志摩両国、合戦及度々、至于十九日、浦七ヶ所皆悉追捕民屋、平家々人為彼或捨要害之地逃亡、或伏誅又被疵之間、弥乘勝、今日焼払二見浦人家、攻到于四瀬河辺之处、平氏一族関出羽守信兼相具姪伊藤次以下軍兵、相逢于江辺防戦、悪僧張本戒光、字大頭 八郎房 中信兼之箭、（下略）



4 吾妻鏡 卷二・治承五年正月